宇部日報　2023年〈令和5年〉　1月24日 火曜日

創刊110周年記念

誇れるふるさと 24地区リレー〈vol.16〉

＜琴芝① 特徴＞

東西2.7キロの細長地形に八つの学校

参宮通りを塩田川から沼交差点付近まで南北に約1・2キロ、東端は常盤湖、西端は真締川に面する東西に約2・7キロと細長い〝うなぎの寝床〟形の琴芝地区。恩田、常盤、上宇部、神原、新川の5地区に囲まれた市中心部に位置する。常盤中、神原中、宇部中央高、慶進高、宇部工高、宇部高専と多くの学校が地域内にある文教地区でもあり、琴芝、神原の二つの小学校が地区内に隣接しているという珍しい特徴を持つ。

琴芝小（左）と神原小（右）がはす向かいに建つ神原交差点（参宮通りで）

百済の王子が地名の由来か

琴芝地区は大きく琴芝、梶返、野中の三つの地域に分けられる。それらの地域が神原、上宇部校区から分離して琴芝校区となったのは1966年と比較的最近だが、それぞれの土地の歴史は古い。「琴芝」という地名の起源について「宇部市史」に記述はないが、かつての琴芝村八王子に最初の社があった琴崎八幡宮に残る1697（元禄10）年の上梁（じょうりょう）文によると、大陸の百済から船で日本に渡り、この地に寄港した王子が芝の野原に座って琴を弾いたことから「琴芝」と名付けられたという伝承が残っている。

梶返地域の中央には平安時代の偉人・菅原道真にゆかりがある梶返天満宮があり、2002年には「千百年祭」が盛大に執り行われた。1100年前ごろは同宮のすぐ西の船ケ崎、清水川交差点、沼交差点付近までが海で、船が入ることができる入り江になっていた。道真が九州大宰府に流される途中、現在の社殿地で嵐をやり過ごし、梶を返して出発したことが地名の起源と伝えられる。

現在は住宅や店舗が立ち並ぶ市街地だが、戦前ごろまでこの辺り一帯は水田が連なる農村地帯だった。野中や梶返の丘陵地は、1698年に常盤池（湖）が完成したことで水田へ発展。琴芝も、その100年後の新川開削により急速に水田地域へと姿を変えた。その後、近代の高度経済成長期以降に参宮通りや産業通り、工学部通りと道路沿いに住宅や店舗が立ち並び始め、次第に田園風景は姿を消していくことになった。

地区住民は、多くの史跡や伝承が残る独特の風土を守ろうと「自然と歴史と未来がひびきあうまち」をキャッチフレーズに地域づくりを推進。郷土の発展に尽くした先人の誇りを次の世代に受け継ぐことを使命に、団結して地域課題に取り組んでいる。

基本データ

- 面積3.2平方キロ（19位）
- 世帯数5306世帯
- 人口9737人（8位）（男性4682人、女性5055人）
- 高齢化率33.3%
- 小学校児童数218人

※世帯数などは2022年4月1日時点